

【はじめの祈り】

ॐ पूर्णमदः पूर्णमिदं पूर्णात् पूर्णमुदच्यते ।
पूर्णस्य पूर्णमादाय पूर्णमेवावशिष्यते ॥
ॐ शांतिः शांतिः शांतिः ॥

オーム、かのブラフマンは無限なり。この現象世界もまた無限なり。
しかるに「これ」は、「あれ」の投影された形にすぎぬ。
たとえ「これ」が取り除かれようとも、「あれ」は以前と変わりなく無限なり。
オーム、一人ひとりに幸あれ、宇宙に平和を、生きとし生けるものに平安を。

[解説]

現象世界は独立して存在しているのではないという考え方です。この世界はブラフマンがあってこそ存在するものであり、ブラフマン上の投影物に過ぎないのです。私たちは暗がりを行けば縄を蛇に見間違ふことがあります。この錯覚は縄があることで生じます。この錯覚が消滅すれば、もはや蛇は存在しません。蛇は縄に溶け込み、消えます。同様に、私たちがブラフマン(宇宙の真我、梵)に目覚めるならば、この世界はブラフマンに統合します。



イーシャ・ウパニシャッド

ウパニシャッドという言葉は書物のことではなく、真実の「知識」[\[訳注1\]](#)を指しています。「知識」とは、普通の知識のことではなく、あなたに平穩、幸福、祝福を授ける至高の知識のことです。

この知識を得るためには、すでにその知識を得た師の元に行かねばなりません。あなたが盲人ならば盲人のところに行って、手引きを願わないはず。同様に、あなたが叡智を求めらば、叡智を得ていない師の元には行かないはず。師には慎み深く接します。師はあなたに一切の金銭を求めませんが、あなたが謙虚に根気よく耳を傾けることを望みます。また、これから教えようとする真理をあなたが求め、敬うことを望みます。あなたは真理を強く求める気持ちを抱き、決められた道徳面や霊性面の訓練を終えてから師の元に向かうべきです。

『イーシャ・ウパニシャッド(Isa Upanisad)』は、「イーシャ」という言葉からはじまるのでそう呼ばれています。「イーシャ」とは Lord(神) のことで、究極の神である自己 Self [\[訳注2\]](#) 真我のことです。他のウパニシャッドとは異なり、全編がマントラから成り立ち、最古にして最高のウパニシャッドであるとされます。『シュクラ・ヤジュル・ヴェーダ』に収められ、主に儀式を取り扱うサンヒターの一部ではありますが、イーシャ・ウパニシャッド自体は不二元の叡智を扱うものであり、儀式とは関わりがありません。

一般にウパニシャッドは、叡智と無知、真理と真理でないもの、唯一の存在と多数の存在にまつわる論議に溢れます。しかし、イーシャ・ウパニシャッドは実に簡潔にこれら論議の全てを解いています。相対である全てのものが、いかに究極的には唯一なる絶対存在に溶け込むかが示されます。この「絶対なる存在」に名前や形はありません。慣例として、それを示すのに「ブラフマン(超越した存在)」「パラマートマン(宇宙的真我)」という言葉を用います。この「ブラフマン」「パラマートマン」が私たち存在の本質であり、存在する全ての背後にあります。名前や形は多様であっても、本質はただひとつです。ひとつなるものについて、ひとつなるものと私たちの関わりについてが、このウパニシャッドで探求される主題です。

[\[訳注1\]](#) Knowledge = 知識、智慧、叡智と訳しました。=ブラフマンを知るための術です。

[\[訳注2\]](#) Self = セルフ=ブラフマン・アートマンを表しますが、真我に統一しました。

【マントラ 1】

॥ अथ ईशोपनिषद् ॥

MANTRA 1

ॐ ईशावास्यमिदं सर्वं यत्किञ्च जगत्यां जगत् ।

तेन त्यक्तेन भुञ्जीथा मा गधः कस्यस्विद्धनम् ॥ १ ॥

移ろいゆくこの世では、全てが神に包まれながらも移ろいゆく。
自己放棄を實踐し、真我(セルフ)の意識に強く在れ。
他人の富を求めるなかれ。

[解説]

この世界も、またそこにある全てのものも絶えず移り変わります。しかし、それを支えるものは決して変わりません。それは常に同じです。それが神です。全ては神に委ねられています。

スクリーンに映し出される映画のようです。映画は動いていても、スクリーンは変わらず元のままです。

それと同様に、この現象世界は神に映し出される映像です。この世は映し出された像に過ぎず、暗がりの縄に蛇を見るようなものです。この蛇は、それのみで存在していません。縄があって存在するのであり、光が射したとたんに蛇は縄に融合します。同様に、ブラフマンを知るならば、この世はブラフマンに溶解し、「私」と「ブラフマン」とが一つで同一であることが理解できます。

この叡智に達することが人生の真の目的です。その時、この世界があなたを妨害することはありません。あなたとこの世の関わりは、長い間、水に浸かっていた白檀が、ひどい臭いを発するようなものです。しばらくは白檀の香りがかき消され、ひどい臭いを放つでしょう。しかし、少しこすれば、ひどい臭いは消え、白檀の香りが強まります。それと同様に、あなたのこの世への執着も一過性にすぎず、長くはつづきません。自らをブラフマンである「純粋な意識」であると思いなさい。たゆまず、確かにそう思うことです。すると、今あるこの世への執着も過ぎゆきます。

しかし、どうしたらブラフマンの叡智が得られるのでしょうか。全てを放棄することによって達成できます。

あなたは、この世もこの世のあらゆる魅力も本物でない、移ろいゆくという意味において真理ではないとたえず心に留め置かねばなりません。ブラフマンのみが、不滅であるがゆえ、真理そのものです。

この世を放棄し、ブラフマンに専心することです。黄金が心を惹きつけようと、それもひと時のことです。決して儂いものを追い求めないことです。決して他人の富をむやみに求めず、自分の富にも執着しないことです。

この世とは移ろうものであると知る人にとって、富は富でなく、どんなものであれ感覚的な快樂は不快なものです。ブラフマンのみに専心し、ブラフマンに浸りなさい。ブラフマンのみが真理であり、あなたがそのブラフマンです。この意識を養い、その他のことには無関心でいなさい。

【マントラ 2】

MANTRA 2

कुर्वन्नेवेह कर्माणि जिजीविषेच्छतं समाः ।
एवं त्वयि नान्यथेतोऽस्ति न कर्म लिप्यते नरे ॥ २ ॥

百年の世を生きたいと願う者は、經典の定める任務を果たすべし。
人よ、かように義務を果たすならば、何ものへの執着もなくなるであろう。
他に道はなし。

[解説]

先のマントラは全ての放棄を呼びかけるものでした。この世の差し出す快楽を追い求めることに何の意味もありません。快楽を求めても、問題に行き着くだけです。なぜなら、快楽はたちまち消え去り、苦しみとなるからです。

しかし、全てを放棄のできる立場にある人ばかりではありません。実際に、大部分の人は人生を楽しむことを望んでおり、このマントラはそうした人々に向けられたものです。

百年もの長寿を望むことに何ら問題はありません。百年を生きながら、經典に敷かれる教えに厳密に従い、欲望を満たしていくことです。そうすることで、ゆっくりと心が浄められていき、快楽への切望も消え、分別が強く培われ、ブラフマンへの愛が高まります。そのときには、幾度もの人生で成された行いの成果にも、もはや執着しなくなります。そうして「放棄の人生」への準備が整ってきます。

これは直ちに全てを放棄できない人々の取れる唯一の道です。道を外れたと心配する必要はありません。時間がかかるだけです。しかし、遅かれ早かれ、彼らもいずれは放棄の道に至るのです。それまでは、ここに示された道に従うことです。

【マントラ 3】

MANTRA 3

असुर्या नाम ते लोका अन्धेन तमसाऽऽवृताः ।
तांस्ते प्रेत्याभिगच्छन्ति ये के चात्महनो जनाः ॥ ३ ॥

この世にあるといわれる太陽なき世界は、魔物らにふさわしい。
彼らは闇に包まれる。

それこそ、愚か者(真我を知らぬ者)らの体験する闇の世界。
真我の叡智に至ろうとせぬ者は自らを殺し、死後かような世界に行くことを余儀なくされる。

[解説]

これは、真我の叡智(ブラフマン)に達しようと努力をしない人への警告です。それはまさに、真の意味で自殺行為です。

五感の快樂の奴隷になり、人生の真の目的をすっかり忘れてしまう。これほどひどいことがあるでしょうか。自らを修めるには、「自分」はブラフマンと一体である「宇宙の真我・普遍的真我」と同一である、「自分」とは永遠に解放された、名前も形もない、何の条件もない、純然たる意識であることを知ることです。

本来の「あなた」は変化にさらされず、はじまりも終わりもなく、思考や言葉も超えています。

あなたは絶対的な存在で、絶対なる智慧、絶対なる至福なのです。

それを知ること、あなたは解放に至ります。もはや生と死の間を行き来することはありません。

本当の自分が何かを知ろうとしないことは、まさに自殺行為と同じです。この世の奴隷として恥をさらし、死後も不運にみまわれます。

【マントラ 4】

MANTRA 4

अनेजदेकं मनसो जवीयो नैनहेवा आप्नुवन्पूर्वमर्षत् ।
तद्भावतोऽन्यानत्येति तिष्ठत्स्मिन्नपो मातरिश्वा दधाति ॥ ४ ॥

ブラフマンは唯一無二。

決して動かず、かつ心より速く動く。

常に先んじ、感覚器官も追いつけぬ。

静寂でありながら、競えば全てを打ち負かす。

その力は、空にみなぎる神の力。水を支え、この世の全てを維持する。

[解説]

ブラフマン(真我)は唯一無二であり、それのみで完全です。決して動かず、常に静かでありながら、心よりも速く動きます。全てを動かす力であり、この世の全てを進行させています。ブラフマンは全世界の「マータリスヴァ(空にみなぎる神)」の力となり、マータリスヴァは原因と結果の因果の原理を担います。

ブラフマンを説明することはできません。思考も言葉も超えています。あまねく遍在し、全てに内在します。形はありませんが、形あるもの全てです。名前はありませんが、名前のあるもの全てです。まさに唯一無二です。それを強調して、ウパニシャッドは相矛盾することを述べています。ウパニシャッドは「ブラフマンは動じない」と言ったすぐあとに「それは心より速い」と続きます。これは何を意味しているのでしょうか。

答えは、ブラフマンには二つの側面があるということです。ひとつの側面は属性がありません(ニルグナ)。絶対真理、「純粋な意識(シュッダ・チャイタニヤ)」です。絶対なる存在、絶対なる叡智、絶対なる至福です。それが「宇宙の真我(パラマートマ)」です。

ブラフマンのもうひとつの側面は属性を備えます(サグナ)。相対的な側面です。この側面においては、形があり、

善と悪、大と小といった資質を持つことができ、そうした資質は無限に多様です。ここで心に留め置くべきは、それらは属性に過ぎず、投影されたもの(アディヤーサ)に過ぎないということです。

それらがブラフマンに影響を及ぼすことはありません。子供たちがつけて遊ぶ仮面のようなものです。

心そのものは、不活性で、真我(アートマン、ブラフマンの別の呼び名)」に動かされてはじめて活発になります。心はそれより早く動くことができません。なぜなら、「真我」が心を動かしていて、それはいたるところにいきわっているからです。

このことは(現れ出るので神々と呼ばれる) 身体の全ての器官についても同様です。自然界のあらゆる原理にも当てはまります。それは因果の原因の背後、結果の背後で働く力です。

空気を例に取ってみましょう。空気と真我との関係においては、空気は「生命エネルギー」と呼ばれますが、空気そのものが生命を維持することはできません。

空気は「空間(マータリ)」を「動きまわる(スヴァ)」ことから、「マータリスヴァ」とも呼ばれます。

しかし、それは宇宙的真我があってこそ活動します。

このマータリスヴァが、ヒラニヤガルバ(ブラフマンの個体としての第一の現れ)、つまりストラートマー(全ての宇宙の真我—花の首飾りをつなげる糸のように)となります。

ブラフマンがこの世界の全ての現象をコントロールするのは、この側面があるからです。

「『それ』を畏れ炎は燃え、『それ』を畏れ太陽は光り輝く。『それ』を畏れ、インドラ、ヴァーユが動き、第五の『死』が活動する」(『カタ・ウパニシャッド』 2-3-3)

ブラフマンから独立して生じるものはなく、かつそれらがブラフマンに影響することはありません。全てを含む現象世界はブラフマンから生じ、ブラフマンに維持され、最後にはブラフマンに統合します。

【マントラ 5】

Mantra 5

तदेजति तन्नैजति तदूरे तद्वन्तिके ।

तदन्तरस्य सर्वस्य तद् सर्वस्यास्य बाह्यतः ॥ ५ ॥

「それ」は動き、かつ動かず。

遙かに在りて、すぐ近きに在り。内に在りて、外に在り。

【解説】

このマントラは、名前もそれを呼ぶ独特な形もないブラフマンを言い表すことがいかに無益であるかを説明しています。

ブラフマンは何ものでもなく、かつ全てです。思考も言葉も超えたものであり、全てを包み込む。それによって全てが存在し、かつのものの本質です。

唯一同一でありつつ、さまざまな名前や形で表れます。しかし、それら名前や形は単なる投影にすぎません。

何ものとも無関係の「それ」そのものです。絶えず変わらず、変えられることなく、何にも左右されません。内在しつつ、全てを超越しています。

ブラフマンそれ自体は、決して動かず、不変です。絶えず同一です。時に雲の背後で月が動くように見えますが、実は月は動かず、動いているのは雲です。

同様に、ブラフマン(真我)は、常に同じです。生まれることも死ぬこともありません。

肉体に関して言えば、誕生して死を迎えるように思えます。私たちは新しい衣服を着ても、古くなり擦り切れれば脱ぎ捨てます。

これが衣服と身体との関わりです。肉体と真我の関わり方も同様です。

【マントラ 6】

Mantra 6

यस्तु सर्वाणि भूतान्यात्मन्येवानुपश्यति ।
सर्व भूतेषु चात्मानं ततो न विजुगुप्सते ॥ ६ ॥

自らに全てを見、全てに自らを見る者は、何者をも憎まず。

【解説】

これは「サーマ・ドリシュタ(視点の公平さ)」と言われるものです。生きとし生けるもの全てが、同じ真我(ブラフマン)です。本質的には、私たちはひとつであり、名前や形が異なるにすぎません。これらの名前や形は投影であり、真実ではなく、私たち存在の部分を作成していません。名前や形は、それを通してその存在を真に見知る、薄いヴェールのようなものです。

男の子が様々な仮面をつけて、友達をからかおうとしています。はじめに虎の仮面をつけて虎のようにふるまえば、ほとんどの子供たちは怖がります。次の瞬間、彼は猿の仮面に付け替え、本当の猿のようにあたりを跳びまわります。今度は、子供たちはおもしろがります。しばらく続け、最後に男の子は仮面をはずし、自分に返ります。すると、子供たちは彼が自分らの仲間のひとりであると知ります。男の子はずっと同じでしたが、仮面が彼を違うものに見せていました。

私たちは同一のひとつのもので、ブラフマンです。名前や形だけが私たちを違うものに見せているのです。

このマントラは、私たちは本質的にはひとつだと見るように強く勧めています。ブラフマンから草木の一本に至るまで、唯一の存在があるのみです。各々の部分を組み合わせて全体をつくりあげているではありません。

真我はいたるところで同一です。私があなたを傷つけるなら、私自身が傷つきます。私たちは皆が幸福になっただけで幸福になります。私たち全て一人間、動物、昆虫、植物—はひとつです。

人生のゴールは、このように存在は唯一であると悟ることです。全てがひとつと感ぜられるならば、憎しみも隠しごともなく、そこには愛があるのみです。

【マントラ 7】

Mantra 7

यस्मिन्सर्वाणि भूतान्यात्मैवाभूद्विजानतः ।
तत्र को मोहः कः शोक एकत्वमनुपश्यतः ॥ ७ ॥

「自ら」が「全て」となり、全てがひとつであると知る者は、
何かだけを嫌ったり、何かだけを愛好することはない。

【解説】

真我の叡智の真の試練は、あなたが全てとひとつであると感じることです。あなたは至るところ、あらゆるものに存在します。「二者」でなく「ひとつ」であり、このひとつなるものがあなたです。

このひとつであるという感覚が、人生で最も高いゴールです。

確かに体験のレベルは多様です。さまざまな名前や形を装うことで、あなた自身が多様になったにすぎません。自分に変化したのではありません。あなたは、なおも唯一で、同じままです。

自分にこのワンネス(ひとつであること)の感覚があれば、執着や憎しみ、嘆きの余地は生じません。二元性—多様を見ること—は無知であるがためです。真我(セルフ)、ワンネスの叡智により、この無知は完全に根絶されます。

【マントラ 8】

Mantra 8

स पर्यगाच्छुक्रमकायमव्रण-
मस्त्राविरं शुद्धमपापविद्धम् ।
कविर्मनीषी परिभूः स्वयम्भु-
र्याथातथ्यतोऽर्थान्
व्यधाच्छाश्वतीभ्यः समाभ्यः ॥ ८ ॥

かのセルフ(真我)は遍在する。
輝かしく、形を持たず、なんの欠点もなく、無傷で、汚されず、全てを知る。
自らの心を治め、至上にして、それのみで永遠に存在する。
彼は全てにそれぞれの役割を課す。

[解説]

ここでの論題は、どうしたら平安が得られるのかということです。

二元の意識がある限り、私たちの他者との関わりは時に友好的であったり、時に敵意であったりします。

理想とすべきは、この世の全てをそのままに受けとめる心—空のように広大な心—でいることです。純粹で、輝かしく、自由で、全てを自分自身が抱きとめる心です。

—これは、私たちが、真我は私であると知った時に可能となります。

不二一元論では、これを真我(ブラフマン)の本質だと確信します。そうでないと思わせているのは、何か偶発的な特質であって、その存在を成すものではありません。

真我は純然たる目撃者であり、現象世界のいずれにも引き込まれることはありません。この世界は真我によって続いています。それはランプのようです。ランプは光を発し、光なしには何も、善も悪も、見えません。しかし、何にランプの光を向けようが、ランプそのものには影響がありません。真我と現象世界の関わりもそのようなものです。

【マントラ 9】

Mantra 9

अन्धं तमः प्रविशन्ति येऽविद्यामुपासते ।

ततो भूय इव ते तमो य उ विद्यायां रताः ॥ ९ ॥

やみくもに^ぎ供儀を行う者(アヴィディヤー)は、盲目になるがごとく、暗闇に向かう。

しかし、神々女神を崇拝するだけの者(ヴィディヤー)は、より暗き闇に向かう。

[解説]

ここで言う「盲目的な暗闇」とは無知を意味します。神々女神を崇拝する人は、崇拝の報酬を求めるので、さらに暗い闇に向います。私たちの中に「私」「私のもの」という感覚がある限り、真我(ブラフマン)との一体化はありません。あなたが「私」「私のもの」と言う時、あなたは自動的に自分というものが肉体と心から成り立つとみなしています。

これは、あなたが真のセルフ(真我)—純粹な意識、万象の真我—について無知であることを示しています。無知な人は「私」「私のもの」という言葉を用います。「私は〇〇である」「私には〇〇の資産がある」というように表現します。

無知な人の心には数多くの欲望があり、これらの欲望のために幾度も生まれ変わります。体を持たないと欲望を満たすことができないからです。しかし、欲望を満たそうとすればするほど欲望が自分の心をしっかり掴み、それが果てしなく続きます。

しかし、人間には思慮深さ、道理、分別が授けられています。そのおかげで、自分の辿っている道は、心に平安を与えはしないのだと気づきます。それとは別の道、放棄の道を辿らねばならないことを理解します。放棄を実践しない限りは、盲人のように暗闇を彷徨い苦しむのです。

暗闇を彷徨う人には2つのタイプがあります。一方は、「アヴィディヤー」(無知)の崇拝者で、つまり、なぜそれをするのかを考えることもなく、定められた供儀をやみくもに行う人々です。彼らが暗闇を彷徨うのもうなずけます。いつの日か、彼らを救う真我の叡智の真理が見え出す日まで、彼らは絶望的です。

しかし、さらに悪いのは「ヴィディヤー」を崇拝する人々です。ヴィディヤーという言葉は普通は「叡智」を意味しますが、ここでは「神々や女神」を意味するために使われています。いつの日にか同等な地位に達しようとして、神々女神を崇拝する人々がいます。その欲望は満たされるかもしれませんが、これは彼らの解放を遅らせるばかりです。このため、ウパニシャッドは、彼らはより深い暗闇にいるであろうと言います。

【マントラ 10】

MANTRA 10

अन्यदेवाहुर्विद्ययाऽन्यदाहुरविद्यया ।
इति शुश्रुम धीराणां ये नस्तद्विचक्षिरे ॥ १० ॥

学識者らは言う。

アヴィディヤー(アグニホートラや他の供儀)の道とヴィディヤー(神々女神の崇拝)の道は、
異なる結果をもたらす。
賢き者はそれを確信している。

【解説】

ヴィディヤーとアヴィディヤーはいずれも真我という叡智を知るためには障害となりますが、ヴィディヤーはアヴィディヤーよりさらに悪いのです。ここでは、「ヴィディヤー」という言葉を特定の意味で用いています。—神々女神の崇拝のことです。

神々女神を崇拝することで、あなたは死後、神々女神の世界に向かいます。しかし、それがあなたにとって有益でしょうか？あなたがそこで過ごす時間は無駄になります。そこにいなければ、ゴールである「真我の叡智」へと向かい、前進することに時間を使えるからです。

それは神々女神の世界では不可能なことであり、よって、あなたはより暗き、より深き闇に進むこととなります。

「アヴィディヤー」とはカルマのことであり、よって障害物となります。あなたはアヴィディヤー—アグニホートラ(聖火の儀式)その他の供儀—を執り行いますが、これは心を浄化する遠回りな手段であって、やはり暗闇を模索することです。しかし、もう一方の道ほどひどい時間とエネルギーの無駄にはならないかもしれません。

シャンカラの最終的な助言はこうです—勤めと崇拝を統合しなさい。両者を統合することで、チッタ・シュッディ、心の浄化につながり、「真我の叡智」への歩みが早まります。

心が浄化されることで、快樂への欲望が減じ、「私」「私のもの」といった意識も引いていきます。これがシャンカラ曰く、徐々に段階的に進む自己解放のやり方「カルマ・ムクティ」の道です。

訳注3 ヴィディヤー(智慧)を神々女神の崇拝と理解するのは独特な解説ですが、極端にならず、両方をバランス良く保つことでこの先の叡智への道に進むことができると、賢者は確信しているという意味ではないでしょうか

【マントラ 11】

MANTRA 11

विद्यां च अविद्यां च यस्तद्वेदोभयं सह ।
अविद्यया मृत्युं तीर्त्वा विद्ययाऽमृतमश्नुते ॥ ११ ॥

神々女神を崇拝し(ヴィディヤー)、かつ供儀を行う(アヴィディヤー)者は、
供儀(アヴィディヤー)により不死へと至り、
神々女神の崇拝(ヴィディヤー)により至福に至る。

[解説]

神々女神を崇拝するにも、供儀を行うにも、前提条件として私的な利益を動機にしないことです。神々女神の天国に至るためというような行為の結実を求るべきではありません。

先に解説されたように、ここでの「ヴィディヤー」という言葉には特定の意味があります。神々女神の崇拝という意味です。

同様に、「アヴィディヤー」にも特定の意味があり、カルマのこと、つまりアグニホートラやその他の供儀を行うことです。それらのカルマは行うことを余儀なくされますが、何ら結果に執着せず行うことで、心の浄化を促します。カルマと崇拝の両方を行うことで、徐々に解放へと至ります。自己放棄の準備の整わない人々の道として、シャンカラも認めるところです。

しかし、この二つを別々に続けたとしましょう。アヴィディヤー(供儀)を行えば、ピトラ・ローカ(祖先たちの世界)に向かいます。真我の叡智からは遥かに遠い暗い世界です。事実、真我の叡智に至るまで、そこで大変長い時間、待つこととなります。

しかし、ヴィディヤー—神々女神を崇拝すれば、より暗き世界に向かい、真我の叡智へ到達するのはさらに遅れます。確かにあなたはデーヴァ・ローカ(神々女神の天界)に至りますが、その世界の快樂に絡めとられ、崇拝の結実が尽きるまで、そこに留まることとなります。そうして、人として再び誕生し、以前の人生の続きから苦闘を再開することとなります。そのため、ヴィディヤーがさらに悪いとされるのです。

しかし、両者を結ぶ、つまり、行うべきカルマを結果に執着せずに行い、かつ神々女神の天界に向かうことを欲せずに神々女神の崇拝を行うならば、両者の恩恵、解放と至福を得ることができます。未だ自己放棄の道の準備の整わない人々には、この道が勧められます。

【マントラ 12】

MANTRA 12

अन्धं तमः प्रविशन्ति येऽसम्भूतिमुपासते ।
ततो भूय इव ते तमो य उ सम्भूत्यां रताः ॥ १२ ॥

「潜在(この世界の原因を成す)」を崇拝する者は、盲人のように暗闇に向かう。
しかし、「顕在(目に見える現実の世界)」を崇拝する者は、より深い暗闇に向かう。

[解説]

アサンブーティが「潜在」、サンブーティが「顕在」です。インド哲学は天地創造を信じません。無から何かが生じることに同意しません。結果があるなら、それに先立つ原因があるはずですが、目には見えなくても、どこかの時点で原因があったはずですが。あなたの前にバニヤンの大樹があるとします。どこから生じたのでしょうか。地面の下の一粒子の種から生じました。目には見えないまま、しかし、種はずっとそこにありました。存在しなかったとは言えません。木は種に潜在し、それが今、顕在となったのです。

私たちをとりまく目に見える全ては植物、天空、山々、川、平野、森、人間、動物など、かつて潜在で、アサンブーティの一部でした。アサンブーティはプラクリティ(原質)と同じであり、力が互いに均衡した状態のことです。インド哲学は、その三種の力を、サットヴァ、ラジャス、タマスと名付けました。この三つが均衡にある限り、何も顕在しません。何が存在するかは、説明しがたいことです。いまだ特定されない何か一波立たぬ海のようなものです。それは無限であり、不変のワンネス(ひとつ)です。

しかしこの均衡が、いずれかの時点で、何らかの理由で乱されます。なぜ乱されたかは誰にも分かりません。おそらく、そもそもそれ自体に不均衡を生じる性質があるのでしょう。これがサンブーティ、顕在のはじまりです。「ひとつ」が「多様」となります。多様はひとつのうちにあり、顕在となりました。まずはじめに顕在となったものは、ヒラニヤガルバ、「はじめに生まれしもの」と呼ばれました。

アサンブーティとサンブーティのいずれを崇拝しようと結果は同じことであり、暗闇へと向かいます。あなたはアサンブーティが何かを全く知らなくても、とにかく崇拝するかもしれません。恐れからかもしれませんし、欲する何かを得ようとして崇拝するのかもしれません。いずれにせよ、無力な盲人となり、未知なるものを絶えず恐れ続けます。

さらにひどいのは、サンブーティ、顕在の世界を崇拝することです。この世界には、あなたを恐れさせる何かがあり、魅了する何かがあります。いずれにせよ、よい結果にはなりません。あなたは無力な奴隷となります。そのことを強調し、より暗い闇に向かうと言っています。

しかし、ヴェーダンタは、自らの内を見るように進言します。自らの真我が至上の主です。真の自分以外の何かの奴隷である限り、幸せにはなりません。ヴェーダンタは言います。自らを修めよと。

【マントラ 13】

MANTRA 13

अन्यदेवाहुः सम्भवादन्यदाहुरसम्भवात् ।
इति शुश्रुम धीराणां ये नस्तद्विचक्षिरे ॥ १३ ॥

学識者らは言う。
サンブーティ(ヒラニヤガルバ)の崇拝とアサンブーティ(プラクリティ)の崇拝は
異なる結実をもたらす。
賢き者はそれを知る。

[解説]

先にシャンカラは、「潜在」または「顕在」いずれかを崇拝することの不毛さを示しました。
顕在化されたもの(ヒラニヤガルバ)を崇拝することで、何か特別な力を身につけることもあるでしょう。

自然界には息を呑むような力があるものです。顕在を崇拝することによって、あなたも多分、同じようなことができるのでしょが、それだけです。

しかし、潜在を崇拝するなら、自らも潜在となり、それとひとつになります。
自らが敬愛するものになる、そう信じられています。

【マントラ 14】

MANTRA 14

सम्भूतिं च विनाशं च यस्तद्वेदोभयं सह ।
विनाशेन मृत्युं तीर्त्वा सम्भुत्याऽमृतमश्नुते ॥ १४ ॥

「潜在(アサンブーティ)」を崇拝し、かつ「顕在(サンブーティ)」を崇拝する者は、
潜在により不滅に至り、
顕在により死を超える。

[解説]

このマントラの一語目の「サンブーティ」は、実際にはアサンブーティ、つまり「潜在」として読まれます。
韻律の関係上、先頭の「ア」が取られています。「ヴィナーシャ(死)」はヒラニヤガルバ、一番初めにサンブーティ
('顕在)となったもののことです。ヒラニヤガルバは、いつかは消失へと向かうものであることから、「ヴィナーシ
ャ」と呼ばれています。顕在化されたものは、潜在にもなりえます。

究極真理も、顕在、潜在のいずれにもなりえます。私たちは、真理とは、顕在であれ潜在であれ、唯一同一である
と心に留め置くことです。私たちは顕在、つまりサンブーティ、あるいはヒラニヤガルバを崇拝することで、自然を超
える力に達するかもしれません。

現代科学は、人間に何ができるのかを証明します。私たちは、確かに、人生の様々な制約を克服することができます。
死への恐怖さえも乗り越えることができます。

ヒラニヤガルバを崇拝すれば、それと同じようになります。ヒラニヤガルバは死にさらされます。存在をもたらされた

ものは、いずれは必ず終わるからです。

これは私たちに死が終わりではないことを教えています。それは単に形が変わることを意味します。それを実感した時に、私たちには不滅の意識がもたらされ、このようにして死を克服します。

また潜在を崇拜することも、好むべきです。潜在を愛せるようになると、潜在とひとつになります。潜在とは原質のことであり、原質は永遠です。よって私たちも、不滅となります。

サンブーティとアサンブーティのいずれも永遠なるものへの意識を授けますが、相対的な意味合いでの永遠性です。絶対的な永遠性には、真我の叡智を通じてのみ、辿り着きます。

ヴィディヤーとアヴィディヤー、サンブーティとアサンブーティ、これら全ては無知の程度のちがいでしかありません。しばしの解放感を与えますが、永遠なる解放ではありません。私たちは、なおもカルマの手の内にあります。

【マントラ 15】

MANTRA 15

हिरण्मयेन पात्रेण सत्यस्यापिहितं मुखम् ।
तत्त्वं पूषन्नपावृण सत्यधर्माय दृष्टये ॥ १५ ॥

真理の顔は、輝く円盤に隠されている。

おお、太陽よ、この世の命の全てを支える者よ、その黄金盤を取り除きたまえ。
真理の求道者がそれを目にすることができますように。

[解説]

ここでは、太陽が人格化されています。太陽は全てを支えています。生命の源であり、全ての源です。太陽は自ら輝き、またあらゆるものを光で照らします。太陽の輝きは私たちの目をくらませるほどです。

ウパニシャッドは言います。太陽の背後に真理があり、この真理とは、他でもないブラフマンであると。私たちは皆、真理、ブラフマンを探し求めています。太陽の目のくらむような輝きで見ることができません。

それはまるで、光り輝く黄金盤が真理を覆うかのようです。私たちは、ブラフマンの顔を見ることができるよう、その黄金盤を取り払ってくださいと太陽に祈りを捧げます。そうすることで、真理を見られるかもしれません。

感覚器官の対象物全てもまた、あたかも黄金盤ですっぽり覆われているかのようで、私たちは対象に惹きつけられます。それらの対象物は、真には実在しませんが、実在するかのように見えます。暗がりでは縄が蛇に見えるようなものです。灯りをさしかければ縄にすぎないことが分かります。

同様に、真理を見るには、光が必要です。真理と真理でないものを見分けるには、叡智の光が必要です。

私たちが目にするこの世は真理ではありません—絶えず変化し、移ろうものであるという意味において、真理ではありません。真理とは不変です。常に同一、不滅です。

ブラフマンのみが真理であり、全ての真我がブラフマンです。私たちは無知によって、一過性のものを永続すると思ひ込み、しがみつきます。遅かれ早かれそれらは滅び、その時私たちは嘆き悲しみます。これらの物が実に魅力的に見えるので、私たちはそうした誤ちを犯します。「黄金」で覆われているように見えても、本当の金ではないのです。

よって、ウパニシャッドは、価値のない、つかの間の物に誤って惹きつけられることがないように、真理そのものを私たちに明かしてくださいと熱心な祈りを捧げています。

太陽は光、光は叡智です。叡智とは真理、真理とは叡智です。

【マントラ 16】

MANTRA 16

पूषन्नेकर्षे यम सूर्य प्राजापत्य
व्यूह रश्मीन् समूह तेजः ।
यत्ते रूपं कल्याणतमं तत्ते पश्यामि
योऽसावसौ पुरुषः सोऽहमस्मि ॥ १६ ॥

おお、全てを支える者、唯一の旅人、導き手よ！
おお、太陽、プラージャーパティの息子よ！
あなたの光線を寄せ集め、光を鎮めてください。
あなたの美しきお姿を見せてください。
あなたのうちにプルシャがあり、私とそのプルシャです。

【解説】

太陽は万物を養います。唯一無二の旅人で、それのみで充足します。

太陽は全てをコントロールするので、ヤマとも呼ばれています。

「プラージャーパティ」とは、生きとし生けるもの全ての主であり、その子供が太陽です。

太陽の光はこの世の全てを照らします。このマントラは、その光を少し寄せ集めて鎮めるように太陽に祈るものです。私の目にはまばゆすぎるからです。私のために、少し光を落としてください。あなたは最も美しく、恵み深い。私はその姿を見たいのです。私はせがんでいるではありません。その必要はないと知っています。なぜなら、あなたの内に住まうもの、私が『あなた』であると知るからです。

太陽はブラフマンの象徴です。はじめは太陽を神格として崇拝します。あなたは太陽の力と美に圧倒され、その一片でもお与えくださいと祈ることでしょう。

しかし、もっと後になって、自分と「それ」とが唯一同一であることを見出します。この啓示は、長きにわたる自制、自己放棄、瞑想ののちに起こることです。

【マントラ 17】

MANTRA 17

वायुरनिलममृतमथेदं भस्मांतं शरीरम् ।

ॐ क्रतो स्मर कृतं स्मर क्रतो स्मर कृतं स्मर ॥ १७ ॥

さあ、死の時は来た。

私の命の力が大宇宙の命の力へと溶け込むように私は祈る。

この肉体が炎に焼かれ、灰にまで焼き尽されますように。

この心は、私が人生で成してきた全ての行為を呼び覚ます。

行いの全てを何度も、何度も、思い出す。

【解説】

私たちは、死ぬ時には様々な思いが心をよぎります。それらの思いには、自分がどのように人生を生きたかが映し出されます。

しかし、死の時には善きことのみを想うように、とりわけ努力をするべきです。

私たちは思ったものになります。

私たちとは思いの産物です。

ですから、自分の心に、善い思いを抱くように何度となく言い聞かせます。

こういう理由で、私たちの死の間際には、親族も特別な祈りを捧げます。

【マントラ 18】

MANTRA 18

अग्ने नय सुपथा राये अस्मान्

विश्वानि देव वयुनानि विद्वान् ।

युयोध्यस्मज्जुहुराणमेनो

भूयिष्ठां ते नमक्तिं विधेम ॥ १८ ॥

炎よ、我らに善きことが訪れますように、

我らを正しい道へとお導きください。

おお、神よ、あなたは我らの思い、行いの全てを知る。
どうぞ、我らの内の悪をとり取り除きたまえ。
我らは幾度もあなたに敬意を表します。

[解説]

これは、私たちがブラフマンに導かれるようにと、炎に捧げる祈りです。死の時に粗雑な体は炎に焼き尽くされますが、精妙な体は残ります。

この精妙体は17の部分から成ります—5つの生命エネルギー(プラーナ)、5つの知覚器官(ジュナーネンドリヤ)、5つの行動器官(カルメンドリヤ)、心(マナス)、そして知性(ブッディ)です。いずれも物質ではありますが、たいへん精妙な形です。心は、これまでに成した行為と思考の印象を保ち続けます。

私たちが死ぬ時、私たちの個としての自己は粗雑な体を去りますが、それは精妙な体に留まります。カルマ(行いの結実)に応じ、精妙体となった魂は2つのローカ(世界)のいずれかに向かいます。—ピトラ・ローカ(祖先らの世界)、またはデーヴァ・ローカ(神々女神の世界)です。

さらに、カルマがその2つのうちのどちらかの世界にどれだけの期間留まるのかを決めます。そうして、未だ満たされない欲望により、魂は再びこの世界に誕生することになります。

このように、魂は、その無益さを悟るまで、死と誕生の間を行き来し続けます。そうして、自己放棄の道へと向きを変えるのです。解放への道を整えるのは自己放棄のみです。個としての自己が大宇宙の真我と融合した時にこの一連の行為は完結します。



『ISA UPANISA』 Swami Lokeshwarananda 原文(英文) <http://www.scribd.com/>より

* 多くの功績によりラーマクリシュナミッションの発展に尽力した Swami Lokeshwarananda (1909-1998)が
シャンカラチャリヤの解釈に基づき解説した『ISA UPANISAD』を日本語に翻訳しました。